

【研究ノート】

ベルリン封鎖前史

清 水 良 三

目 次

- (一) はじめに
- (二) 一九四七年当初におけるソ連の態度とその変化
- (三) ベルリンの民主主義的指導者の政治的見解の変化
- (四) ベルリン市政府と西側諸国との関係
- (五) 群集への訴え

ベルリン封鎖前史（清水）

三七

(一) はじめに

一九四七年から一九四八年にかけての年月はドイツの戦後史において重要な分岐点をなす年月であった。ソ連の占領地域においては反ファシスト・民主主義活動の初期の段階は終った。この時期以降東西両ドイツにおける政治的経済的変動が共通性を示すことは殆んどなくなってしまった。東西両勢力の交点であるベルリンに於て最初の「権力検証」が行なわれ、状況は断崖上端の危険性を孕んだ。東西両陣営が相互に対立結束する時期が始まり連合国管理理事会の没落の時期がはじまった。一九四八年三月二〇日の会合はこの理事会の最後の会合となったが、それは西側の三国が彼らのドイツ政策がソ連代表の主張によって妨害されるのを認めようとしなかったからであった。この時此の月の管理理事会の議長当番であったソ連のソコロスキー元帥は、三人の西側軍司令官に対して、当年の二月と三月に行なわれたロンドンの西側三国会議において、三国間において協定されたドイツに関するあらゆる協定を、報告するよう要求したのである。三人の西側軍司令官はこれを拒絶したのであったが、それから十日後ソ連はベルリン市の商業交通の全面的な管理を目標とする措置をとり始めたのであって、これがベルリン封鎖の予告であった。ソ連はマーシャル計画の資金供与により西ベルリンも当然強化されると思っていたのであり、その為マーシャル計画が実行を開始する前にアメリカ人をベルリンから排除しようと思っていたのである。(トロイエ・ドイツ史・一九七八年より)

(二) 一九四七年当初におけるソ連の態度とその変化

ベルリンの支配権を維持し西側のベルリンへの出入を阻害しようとするソ連の企図に直面した連合国側は、或る時は大胆な言葉や軍事行動移行へのゼスチャーで、また或る時は決定を回避したり妥協したりする態度で、断続的な反応を示した。

一九四七年のはじめの数ヶ月間に、ソヴィエトの支配する新聞は、ドイツにおけるロシアの軍事的強力さを強調しはじめた。そして、ソヴィエトの戦闘機がベルリンの上空にあらわれた。この宣伝に対抗するために、クレイ將軍は一団のアメリカ合衆国戦闘機群に対し、五月三十日に「ユー・エス」の字を画いてベルリン上空を飛ぶよう命令し、七月二日には、アメリカ軍司令官は大型のB 29爆撃機数台にベルリン上空を飛ぶよう命令した。ソヴィエト軍政官の抗議に対してクレイ將軍は、彼はただ単に、「アメリカ合衆国がベルリンの安全保障協定 *the security arrangements* に参加する能力を持っているのだ」ということを、証明しようとしたに過ぎない、と返答した¹⁾。

大型爆撃機が上空を飛行した時に、ソヴィエト軍政本部にいたアメリカの一連絡將校が報ずるところによると、この時数人のソヴィエトの將校が窓のところに駈けよって、飛行機に向ってこぶしを振り回したそうである。

また、一九四七年中にハウリー大佐は、ソヴィエトがベルリン支配権を獲得するために、食糧をその政治的武器として使用しようとしていることを察知した。ソヴィエトが以前からの協定に違反してベルリンの西側管区に新鮮なミルクを供給することを拒絶した時、ハウリー大佐は二百トンのコンデンスミルクと百五十トンのパウダーミルクを

貯蔵するための手をうち、アメリカ管区内のドイツ人に対して、少くも三十日間の食糧供給をすることが何時でも出来るという態勢を確保した。²⁾

一九四八年のはじめ頃から、英米の新聞記事には、クレイ將軍とロバートソン將軍が、ソヴィエトが英米勢力をベルリンから強制的に追出そうとするかも知れないということに、気がついているという話が載りはじめた。もしもソヴィエトがこの町を東地域に編入しようとするならば、ベルリンの公共設備の大部分がソヴィエト管区内にあるから、西側諸国がベルリン内に止まることは非常に困難であろうという記事も、それらの新聞にみられた。

だが、ソヴィエトの統制している新聞にみられる脅迫的な表現を、顔面どおり受取るうとしない傾向も、何人かの役人にはみられたのである。かくてアメリカ合衆国軍政府の一高級官吏は、「毎日評論」『Tägliche Rundschau』の激烈な調子の論説を批評するにあたって、この論説は単にアメリカ人や英国人の神経を煩わすことのみを意図して書かれたものであると述べた。封鎖の可能性について彼は、「ロシア人は計画的にしかも公然とベルリンの住民を飢えさせ、単にわれわれを困らすために、われわれの統合の唯一のシンボルを破壊しようとするほど馬鹿であるとは思われない。これは友人を獲得し、人民に影響を与えるやり方ではない」と述べた。

他方において、「ロシアの政治的指導者に極めて近い」筋の者は、「毎日評論」の論説は恐しいほどの熱意をもって書かれており、アメリカ人の「神経をいらだたせる」ために書かれたのではない旨を述べていることが、報道されたのである。⁵⁾

ワシントンでは、國務長官代理 Acting Secretary of State のラヴィット氏が新聞記者会見において、アメリカ合衆国はひきつづきベルリンに軍部の代表を駐在させるであろうと述べた。彼は、ベルリンとフランクフルト間の列車

の遅延やソヴェイト当局に依るアメリカ人の拘留を含めて、一連の事件が発生したが、このような事件が続発する兆候はないということ述べた。⁶⁾

ソ連の脅迫を無視しようとするアメリカの役人たちのこういう傾向は、クレイ將軍が一九四八年三月五日にアメリカ陸軍情報司令官 The U. S. Army Director of Intelligence に、次のような警告的伝言を打電した時に、終止符をうった。

論理的分析の結果として私が感じ私が抱いて来た過去多くの月間における見解は、すくなくも十年間は戦争はあり得ないということであった。ここ数週間来、私はソヴェイトの態度に微妙な変化を感じて来ている。この態度を定義することは出来ないが、何か劇的な急変が起るかも知れないという感じがある。私自身の考えに起ったこういう変化を何らかの資料または表面に現われた証拠で説明することは出来ないが、われわれが公式に接触している個々のソヴェイトの役人にみられる新しい緊迫感よりほかに、これを説明すべき材料がない。証拠となる資料がないので、公式の報告を出すことは出来ないが、私の感じは本当である。本件について幕僚長官 (the chief of staff) に勧告すべき価値があると、貴方に感じられたものがあるならば、御勧告願いたい。⁷⁾

クレイ將軍の電報が到着したのは、チェコスロヴァキアに共産主義者の叛乱が起った直後であった。世界に緊迫感が起りつつあった。そしてアメリカの情報機関は最高の速度で活動を開始した。三月十六日に中央情報機関 the Central Intelligence Agency は、ここ六十日以内に戦争は起りそうもないという予想をし得たのみであったが、その後の予測はさらに六十日間その期間を延長した。⁸⁾

三月三十一日にクレイ將軍は、ソヴェイト地域を通過する軍人および軍用荷物を制限するつもりであるという通知

を、ソヴィエト側から受けたことを報じて来た。クレイはワシントン政府に対して、アメリカの列車に乗っているアメリカ軍人はソヴィエト官憲が検閲のために列車内に入って来ることを阻止し、もしも必要ならば射撃するようにという命令を出したらどうかと提案し、訓令を求めて来た。

アメリカ合衆国軍部の最高指導者たちは、列車の防衛隊員は自衛のためにのみ其の武器を使用すること、また英国軍部も同様な訓令を出すかどうかを確かめるために英国側と接触することという条件つきで、クレイの計画を支持することを決定した。だが、この後の方の条件は、英国側は既に同様な対策を講じているという情報が入ったので、確認のための接触は不要となった。⁹⁾

ワシントンにおける論議は、背景となっている顕著な軍事的弱点に対して向けられた。アメリカ合衆国はどこへ軍隊を送るにも、部分的な動員をすることなしには一師団約一万五千人さえも送ることは出来なかった。¹⁰⁾

英国政府は、断固とした立場をとるつもりであった。しかし、はつきりとどういふ行動をとるべきかといふことは分らなかつた。英国政府は彼らの軍隊がベルリンへの出入途上で発砲するようなことは希望しなかつた。だが、それと同時に、彼らはベルリン市における彼らの立場を維持しようといふ決心はしていたのである。¹¹⁾

フランスの政策はそれほど確固としたものではなかつた。ベルリン駐在の一フランス高官は、パリに起りつつある感情として、フランスがベルリンに対して持っているのは政治的責任であつて、もしもフランスがベルリンから品位を失わずに退くことが出来るならば、フランスは喜んで身を退くであろうといふことを報じている。

ベルリンにおけるアメリカの立場を擁護しようとしてゐるクレイ將軍の努力を、ワシントン政府が支持しようとしていた間においても、それは可能であろうかといふ疑いや、それは戦争になるのではなからうかといふおそれが、多

少あったことは明らかである。三月三十日にアメリカの陸軍省 (the Department of the Army) はクレイ將軍に対し、軍政府要員の家族たちがドイツへ行くのを止めること、及び既にベルリンおよびアメリカ地域にいる軍政府要員の家族たちが、徐々に退去して行くことも止めることという彼の提案について、彼の詳しい説明を求めた。彼は駐留軍要員の家族たちが動けば、病的な興奮状態をつくり出し、ドイツ人たちは其の身の安全を保障するための手段として共産主義のもとへ走るようになるだろうという考えから、家族たちの移動に反対した。彼はまた、それが至るところで共産主義者の力を強め、特に選挙を数日後に控えているイタリアにおいて、共産主義者の力を強めるであろうという点に注意を喚起した。¹²⁾

数ヶ月後、陸軍省はクレイ將軍に対して、アメリカ人の家族をベルリンからひき上げよという圧迫が、本国において起りつつあることを報じた。事実、多くの軍政府所屬員は、彼らの家族を本国へ帰すべきことを要求したのであるが、クレイ將軍が軍政府所屬員に対して、もしも家族やその他の扶養人員を撤退させたいのなら、それらの人たちを伴って彼ら自身も撤退すべきであると命じたため、これらの要求はそのほとんどすべてが撤回された。

クレイ將軍は陸軍省に対して、ベルリン在のアメリカ人に対する補給は、非常に僅かな空輸でいつまでも行なうことが出来るから、家族その他の被扶養者を本国に帰すべきではないという回答をした。彼の報告書の一部には次の如くある。

「イタリアの選挙を目前にし、ヨーロッパの現状に直面しながら撤退することは、殆んど全く考えられないことである。¹³⁾」

だが、交通制限が増大したことにかんがみ、四月十日に陸軍長官は軍政長官に対し、もう一度電文を打ち、米軍が

ベルリンにとどまるべきだという国務省の立場に变りはないが、この問題は、ワシントンにおいて絶えず論議されていると述べた。これに対するクレイ將軍の返答は、アメリカは実力によって追出されないかぎり、ベルリンを放棄すべきではない、というものであった。ベルリン人に対する食糧補給を断つために、封鎖の範囲を拡大すれば、西側諸国を追出すことに成功するかも知れないが、いかにロシア人と雖も、ドイツ人民の感情を完全に背反させるような行動をとるほど馬鹿ではないだろうというのが、クレイ將軍の考えであった。このことに関連して次のようなことが想起される。すなわち一九四八年中にドイツに駐留していたアメリカ合衆国の一高級官吏は当年の六月にさらに陰鬱な情報をワシントン政府に送ったのであるが、彼は其の中で、ベルリンの全面封鎖は西ベルリンの食糧補給に非常な影響を与えるから、ドイツ人民の気持は西側諸国に背反し、ベルリンにおける西側諸国の立場は維持し難くなるであろうと述べた。そして彼はさらに続けて次の如く述べている。「われわれはチエコスロヴァキアを失なった。ノールウェーは脅かされている。われわれがベルリンから退却するとする。ベルリンが陥落すると次に西ドイツが陥落するであろう。もしも我々がヨーロッパを共産主義から守るつもりならば、われわれは動いてはならない。……民主主義の将来のためには我々はとどまらなければならない」（但し、ここでいうノールウェーは脅かされているという箇所はこの高官の思い違いであらう。この時脅威をうけていたのは、ノールウェーではなくてフィンランド¹⁴⁾であった）

アメリカ軍政長官はベルリンにおける連合国の立場は維持せらるべきであると主張し、英国外務省もすくなくとも表面的には、同様の見解を抱いていたけれども、在ベルリンの西側諸国官史の間には、事実ソヴェエトがこの町に全面的な封鎖を課そうとするかどうかについて、またそのようなことがあるとしても、それは連合国がベルリンにとどまることが出来る範囲内で行なわれるのであらうかどうかについて、意見の一致がなかったのである。例えば、ハウ

リー大佐は、ソヴィエトは多分封鎖によって西側諸国をベルリンから追出そうとするであろうという結論に達し、そういう万一の場合に備える計画を準備した。だが、彼の結論はクレイ將軍の政治諮問委員たちの全面的な支持は得られなかったし、その他の部門においても、十分な支持は得られなかったのである。ハウリーが彼の計画について議論をかかわしたフランス管区司令官ガーヌヴァル將軍は、ロシア人がこの町を封鎖するような残酷なことはやらないだろうとは確信していたが、一応あり得ることとして、それに対する準備をしておいた方がよいだろうと考えた。イギリス管区の司令官ハーバート將軍は、もっと悲觀的な見解を持っていた。彼もまた、ソヴィエトがこの町を封鎖するよ
うなことはないだろうと考えていたが、もしもソヴィエトが封鎖するならば、西側諸国はこの町を去る以外に手はないだろうと考えたのである。¹⁵⁾

封鎖が課せられるまさにその時まで、そしてその後も同様に、連合国の官吏は、彼らがベルリンにとどまるべく努力すべきか否かについて、そしてまた、もしもそうすべきだとするならば、それが実現出来る望みがあるかどうかについて、議論をしつづけたのである。決定的なことについては、ソヴィエトが封鎖した場合、どうすべきかということについて、ワシントンにおいてもロンドンにおいてもペリにおいても、枢要の地位にいる人たちの結論は出ていなかった。¹⁶⁾

アメリカ合衆国においては、最高の地位にある人が注意深くベルリン問題を検討するのを妨げるような、数多くの要素があった。フォレストル国防長官はその日記の中で、四月中にソヴィエトの危険性についてのワシントンの警戒は弛緩したと述べ、また、一九四八年の選挙戦がはじまったことは、基本的な政治的決定をさらに困難ならしめたとして述べている。さらに、イスラエルの承認や軍事予算の標準についての、いつ爆発するともわからないような諸問題

が、まずこれらの人たちの注意を奪っていた。¹⁷⁾

だが、このように西側の政策に明確性がかけていたにもかかわらず、一九四八年春には、西ベルリンをさらに自給自足の都市とするためのいくつかの手が打たれた。ハウリー大佐の計画にもとづいて、アメリカの当局は食糧の貯蔵をやるうとした。彼らの努力はソヴィエトの輸送制限に遭って、大した成功は収め得なかった。事実、ベルリンにおける小麦粉の貯蔵量は、一九四八年一月卅一日当時よりも六月卅日の方がはるかに低かったのである。

ベルリン食糧事務局(The Berlin Food Office)の役人のいうところによると、アメリカ合衆国管区の小麦粉貯蔵量は一月卅一日には六十四日分であったものが、六月卅日には僅かに二十二日分しかなかった。英国管区内においては六十四日分に対して二十日分、フランス管区内においては二十六日分に対して三十七日分の貯蔵量があるのみであった。

だが、その他の大部分の産物の貯蔵は増大した。封鎖前にとられたもう一つの手段は、英国管区内に発電所を再建することであった。ドイツ当局は暫くの間この発電所の再建をせがんでいたのであって、一九四八年四月になると、英国はこの仕事に着手するよう命令した。

特に全面封鎖の場合の為に意図された訳ではないけれども、事実上その為の準備になるような手段が講ぜられ、連合国人に対して空輸で補給する準備も、その中に含まれていた。そういう手段が講ぜられはじめたのは、ソヴィエトが軍用鉄道輸送に干渉した四月においてであった。この「子供のような空輸」'baby airlift'で運ばれたトン数は、後で行われたものに較べると、僅かなものではあったけれども、これによって空軍が得た経験は価値あるものであることが判明した。フランクフルト郊外の大きなライン・マイン空軍基地(the Rhein Main air base)には輸送管制

地点としての設備がなされた。そして割当物質を確保し、輸送するために協定が成立したのである。だが、必要が起きた時に、空軍によってベルリンに輸送される最大限のトン数を決定するための努力がなされなかったということは、明らかであった。懸案中の西独における通貨改革から生ずるであろう事態に対応するための計画の方が或る程度規模が大きかった。西側諸国は東独においても通貨改革がなされなければならないということを実感していたし、ソヴィエトがベルリンを含ませるかどうかについて半信半疑であったが西側諸国はもしも必要ならばベルリンに西側の貨幣を通用せしめよう考え、そのための協定を行なった。「B」という印をつけられた充分な量の新貨幣が造られ、ベルリンへ輸送出来る態勢がとられた。¹⁸⁾

だが、ベルリンに二種類の対立的な通貨が使用された場合に、ドイツ人の市政府が当面しなければならぬ困難な状況等の如き、未だ討議されない数多くの問題が残っていた。

さらに、西側の官吏たちは、西独の通貨改革がベルリンの政治的地位に当然及ぼすべき根本的な変化を考慮に入れた一連の行動をとることについて協定に到達していなかった。西側諸国は西独の通貨改革にこの町を含めない決心をしていたが、もしもソヴィエトがソヴィエト地域の通貨改革にベルリンを含ませようとするならば、それを差止めるための手段として西側の管轄する通貨を導入する準備をしていたのである。彼らはベルリンがソヴィエト地域経済の一部に編入されるのを見たくはなかったけれども、それが成功裡に西独経済に編入されるであろうということも信じていなかったのである。西独そしてまた東独を含めての通貨改革の後には、ベルリン経済が能率的に作用するようにロシアとの間に何らかの協定を結ばなければならぬであろうというのが一般に持たれていた意見であった。だが、このような協定の詳細がどのようなものになるかは、何人も測定することは出来なかった。東ドイツおよび西ドイツで、

ひとたび別々の貨幣が採用されるならば、四国管理を基準にしたベルリン経済問題の実際的な解決は不可能であろうというのが、アメリカの或る上級の財政専門家の意見であった。「英国人となら協定に到達することが出来るであろう。だが仮りにそういうことがあったにしても軋轢が残ったであろう。ロシア人との協定達成は不可能であった」と彼は述べている。

封鎖前の最後の数週間においては、ベルリンの最高級の西側の官吏たちは、ソヴィエトの意図の測定について意見がまちまちであった。西側への交通にこれ以上の干渉が行なわれる可能性があるという報道が一方においてされていると、他方においては交通制限が増大する傾向はみられなかった。そして現存する交通制限のいくつかは正当な理由があるように思われた。六月十九日にソヴィエトはベルリン市民向けの補給品を積んだ沢山の自動車、車体があまり古くて安全ではないからという理由で、追いつ返した。¹⁹⁾ 次の日も、ソヴィエトが軍事輸送を検査する権利を再び主張したために、アメリカ合衆国当局は軍用列車輸送を再び中止し、連合国人のための必要品を補給するために再び小規模な空輸に依存しはじめた。²⁰⁾ それでも完全な封鎖が六月廿四日にはじまった時には、大部分の役人にとってそれは驚きであった。

これを要約すると、西側はソヴィエトが西ベルリンの一般市民を封鎖しようとするだろうということを本気にしてはいなかった。だがかりに封鎖が行なわれた場合、連合国側はベルリン市内における彼らの立場を維持出来るかどうかについて確信はなかった。そして、二、三の例外を除いては、そういう不慮の出来事に対応する準備をしていなかったのである。連合国側は、ベルリン通貨の管轄権を獲得しようとするソヴィエトの努力から偶然発生することあるべき事態に対処するために、さらにある程度広範囲な計画を持っていた。だが、そういう計画が長期的にみてベル

リン市のためにどういう意味を持つのかという問題に、真正面から取組んではいかなかった。封鎖が来た時には、まだ為されるべき非常に多くの決定が残っていたのである。

(三) ベルリンの民主主義的指導者の政治的見解の変化

一九四六年および一九四七年の初期においては、市政府の四国全部との協力を可能ならしめるような何らかの様式が発見されなければならぬだろうというのが、ベルリンの指導者たちに一般に受入れられた考えであった。ベルリンの指導者たちは、彼ら自身の立場を全く西側の立場と同一視するという考えを非現実的であるととして排除し、その代りに全四国の看視者としての市独特の地位を維持し、かつドイツの再統一を促進するためにたたかった。

勿論、色々な政治グループの間には意見の相違があった。キリスト教民主連合(CDU)は、ベルリンは東西間の架橋または仲裁者としての役割を果し得るとの信念を持ちがちであった。そして四国の協力がベルリンにおいて達成されるならば、その協力は次第に全ドイツに拡大され得るという信念を持ちがちであった。キリスト教民主連合の指導者の中には、丁重さの中にも確固とした政策をとることによって、ソヴェエトを「操作」し得ると信ずる者もいた。一方において社会民主党SPDには、この問題を権力闘争であると看做す傾向があった。ベルリン人ならびに西側同盟諸国が、ベルリンの政治生活を支配しようとするソヴェエトおよびドイツ共産主義者の総ての努力に力強く抵抗するならば、ベルリンおよび全ドイツが或程度の自由を達成し得るに必要な動態的な勢力均衡が実現するであろうと、彼らは考えたのである。

キリスト教民主連合(CDU)は、あらゆる種類の意見を持つドイツ指導者たちの間に「懸橋」的な会談を実現しようとする努力し、また此等の努力に社会民主党(SPD)は疑を持った。かくしてこれらの意見の相違は強められて行ったのである。一九四六年に、キリスト教民主連合の指導者たちは、東西両ドイツの意見を代表し得る機関を設立しようという意図を持つ討議を開始しようとした。だが、社会民主党(SPD)の指導者たちは、この討議に参加することを拒絶した。²¹⁾

或るキリスト教民主連合(CDU)の役員は、一九四七年十一月中にベルリンの総ての主要党派から顕著な政治指導者を数多く集めて、ドイツ統一を支持するという共同の誓約を得ようとした。だが、再び社会民主党の指導者たちは此の計画に反対したのである。そして会議は意見の一致に到達し得なかった。²²⁾

一九四七年十月に、エルンスト・ロイターは社会民主党(SPD)の性格を示すような見解を示した。彼は社会民主党を吸収してしまおうとする社会主義統一党(SEU)の努力を簡単に概括した。そして、自由の地位にとどまろうとするベルリンの闘争が成功しつつあることは、ベルリンが再びドイツの首府として貢献しようとする道徳的な権利を確実にし且強化したという意見を述べた。素朴で、しかもきわめて明白な利己的な理由の故に、東ドイツ地域を抹殺しようとする政治的要素があると彼は述べた。ベルリンからウラヂオストックへの範囲にまたがる帝国の存在を喜ぶ他の勢力も存在している。だが、と彼は続けて述べた。自由を愛するベルリンの人たちが、西欧との紐帯が切られることを決して許そうとはしないという事を証明出来るかぎり、そういう計画はどれもこれも実現しないであろう。ドイツ統一の理念が維持されている地域があるかぎり、そして、東西間の紐帯が強く保たれているかぎり、ドイツの中央並にヨーロッパの中央に最終的な分割線を引くのは容易ではないであろう。²³⁾

更に小さな組織である自由民主党は、一般に社会民主党と同じ態度をとっていた。

一九四八年の最初の数ヶ月を通じて、キリスト教民主連合(CDU)と社会民主党(SPD)の両者が其見解を維持することは次第に難しくなつて来た。西ドイツへのベルリン交^{コミュニケーション}通を閉鎖し、市政府(マダストラート)の機能を妨害し、東ベルリンをソヴィエト地区行政に編入しようとするソヴィエトの方法は、東西両ドイツにおける通貨改革の切迫と同じく、民主主義的な指導者をして「中間的な立場」はもはや不可能であり、ベルリンは西側と運命を共にしなければならぬだろうということを、益々確信せしめるに至つた。

此の様な見解の変化は突然起つたことではなかつた。完全な封鎖が実施される殆んどその時まで、社会民主党とキリスト教民主連合のいずれにも、意見の調整は可能であつて、ベルリンは其の四国管理の性格を維持出来ると信ずる強力な要素があつた。一九四八年四月十五日になつてもまだ、ズール博士 Dr. Sühr は占領国家間の緊張は緩和して来たという信念を述べ、そして此の緊張の緩和期間が『自由な統一されたベルリン行政を可能らしめ、ドイツの統一がすぐにも回復し、ヨーロッパの平和を確保する事を可能ならしめるような協力の様式を見出すために』²⁴⁾使用されるようにという希望を表明した。

ベルリンの「中道主義」指導者たちの何人かはまた、彼らがいずれかの立場をとらなければならなくなるような事態を避けようとして、ドイツの通貨改革を延期しようと試みた。五月の末に副市長フリーデンスブルグはアメリカの連絡将校に、ドイツの二つの部分に異つた通貨が採用されることは、ベルリンに「経済的にも政治的にも破壊的な状態」をもたらすことになると述べた。六月九日に彼はフランス軍政官ケーニツヒ將軍 General Koenig に書簡を送り、総ての地域およびベルリンにおいて、此の問題の単一様式の解決がなされるように提案が行われるまで通貨改革

を延期するよう提案した。七月のコマンダトゥーラ(四国統合司政部)議長・ガースヴァル將軍 General Ganeval への覚書で、これら三つの総ての民主主義政党的指導者は、通貨改革を別々に行う計画についての彼らの関心を表明した。此等の最後の瞬間における意見の表明に好意的解答を与えたのは、ソヴィエト軍司令官ソコフスキーだけであつた。彼は冷笑的に次の如く述べた。ソヴィエトは全ドイツの通貨改革に好意を持っている。何故ならば、ドイツの一または幾つかの地区における別箇の改革は「ドイツ人民の利益並にヨーロッパの平和を愛好する民主主義諸国民の利益に合致しないドイツの最終的な分裂」を意味するだろうから。²⁵⁾

ベルリンの政治家の中には、東西ドイツが別々に通貨改革を行った場合には、ベルリン市が一または他の側の経済に結びつけられないために、第三の貨幣を採用した方がよいという意見を持つ者もいた。

同様にベルリン政治家の多数は、最初、ロンドン勧告並に西ドイツ国家をつくろうという考えに反対した。斯様な考えはベルリンを孤立化し、東地域の権力の中に此の都市を投込むことになるだろうと彼らは考えた。一九四八年六月六日の西ドイツ行政管区長 West German Minister Presidents 会合で、市行政府(マヂストラート)の代表者たちは此等の見解を表明した。そして六月十三日に市議会は、ロンドン勧告を批判する決議文を採択し、全ドイツ国民議会選出のための自由選挙を呼びかけた。

通貨改革並にロンドン勧告に対する斯様な態度は了解し得るものであつた。だが、ドイツの統一と四ヶ国通貨改革を実現しようとする長い間の闘争において、それらの努力が完全に不成功であつたという点からみて、英米両国は不愉快な現実を無視しようとする強い傾向を示した。だが、此等の現実を来たるべき事態の形態をかすかながら見ていたエルンストロイター並に彼を取巻く数人の人たちによって認められていた。

一九四八年春にロイターは次の如く結論した。即ち、ソヴィエトはドイツを分割し、ベルリンを吸収してしまおうとしている。ベルリンが其の自由を維持するための唯一の方法は、西ドイツの経済的發展と協調し、アメリカの援助を確保することであると。ベルリンにとつての最大の危機は、西側諸国がベルリンを負担であると考え、ベルリンから撤退してしまうことであつた。それ故西側諸国に出来る限りの圧力を加えるために、ロイター與其他幾人かの社会民主党の指導者たちは、ベルリン市民を動員して西側の政策に賛成であることを明示させ、自由世界の注意を得べく努力しようと決意した。もしもベルリンが自由の象徴として認めらるべきだとするならば、民主主義諸国にとつてベルリンを見棄てることはさらに困難なることになるであろう。此の方策は党指導者たちの何回かの会合で論議せられた。そして幾人かの著名な市の役員が、一九四八年の春に外国旅行をした一つの理由でもあつた。さらに、封鎖教週前に、社会民主党の経済問題評議員であるグスターフ・クリンゲルヘーファは、西側諸国が西ドイツの貨幣をベルリンに導入するよう主張したが、其の理由はソヴィエトが彼ら自身の条件によつてでなければ、全ドイツのための通貨改革に同意しそまないからとつたのであつた。

社会民主党の何人かの指導者は西側諸国と同一に取扱われることに全面的に賛成ではなかつた。しかし、少くとも彼らはロンドン勅告を廃棄することを差控えることに同意した。だが、一つの原則については社会民主党の総ての主要な指導者並に其他の民主主義諸政党の大部分の指導者たちの意見は一致した。その原則とは、自由の為には闘う値打があるということであつた。

(四) ベルリン市政府と西側諸国との関係

事態の發展に圧迫されて、ベルリンの民主主義的指導者たちは、次第に彼らの利害関係と西側諸国との利害関係を同一視するようになって来たが、ベルリンにおける西側軍政府と彼らとの封鎖前における関係は、決して良好なものではなかった。此の期間の大部分を通じての連合国側の公式の態度は、依然としてソヴィエト側との協調の方途を見出そうとするもので、四国間の協和を堅く維持して行こうと努めていたのである。また、ドイツ人の利益のためにロシア人と闘争しようという考は、多くの連合国官吏にとって好ましくない考えであった。彼ら連合国官吏たちは、それ故、ドイツ人を最近彼らによって打負された敵であると看做し続けようと意識的に努力したのである。²⁰⁾

其の結果、民主主義的ベルリン人の利益は、四国協和の理想のために時々犠牲にされた。例えば教育担当の市評議員であった一社会民主黨員は、共產主義教育のために学校を使用させまいとしてソヴィエトの不興を買い、四国共同決議によって其の職を追われた。後になってアメリカのスポークスマンたちは、此場合における合衆国の行動は知識不足に依るものであったことを認めたが、損害は事実であった。²¹⁾

西側諸国の妥協への意志を示す斯様な例があったことと、彼らが彼ら自身の利益を防衛する能力に欠けているらしく思われたことは、ベルリンの民主主義的指導者たちに、西側の援助に依存することは出来ないという感じを持たせた。一九四七年六月に、即ち教育担当の市評議員が追放された直後、エルンスト・ロイターは此の決定から起り得べき結果について、烈しい口調で次の如く述べた。

不安と不確実の感で吾々の政府の全構造は根本まで動揺させられ、民主主義の理念―戦勝国家が吾々の町に入つて来たのは此の理念のためなのだ―が―は重大な損害を蒙らなければならないということ、吾々はどうしても予想せざるを得なくなる。[※]

別の著名な社会民主主義者は、此の追放に対する抗議措置として、市行政政府（マデストラート）は単に占領国の行政機関として認めらるべきであつて、市議會に責任を持つ機関として認めらるべきではないと述べた。此の提案がもしも受諾せられたならば、市政府を甚しく弱化することによつてソヴェエト側に有利になつたであらう。

西側の官吏たちは多分、彼らが東西間の基本的な不一致をドイツにかくすのに非常に成功しているということに気がつかなかつたのであらう。市政府の一高官が封鎖の後で述べたところによると、一九四八年の初期まで彼は主要問題に関する四国の調和は維持されていたものと信じていた。そして、ソ連と西側諸国との相違は些細な問題についてであると思つていた。

さらに、ドイツ人官吏と多くの西側官吏との間の個人的な関係は、時によると誠意のあるものとは全く言えないものであつた。たとえばロイターは其の實力と独立心の故に、多くのフランス人官吏から信用されていなかった。一英國官吏は、彼が事務所を確認（confirm）されていらないからという理由で、彼に話し掛けることを拒否した。彼を横柄で野心的であると考えるアメリカ人の官吏もいた。

ドイツの民主主義的指導者と占領国官吏との間の軋轢のいくつかは、ベルリン軍政府の権限の範囲が混乱している結果生じたものである。ドイツ人である市の役人は四国諸管区の軍政府の数多くの色々な部局の監督を受けたばかりでなく、四ヶ国共同の立場から会合した同じ軍政府官吏からの監督も受けた。例えば、公共設備並に輸送担当の市評

議員としてエルンスト・ロイターは、電気並に燃料についての四ヶ国委員会の諮問に応じなければならなかったのみならず、四国諸管区の各々にある多くの部局にも、同じように返答しなければならなかった。此等の色々な部局や委員会は、屢々矛盾した訓令を出した。さらにまた、軍政府命令の中には、ベルリンの事情を考慮に入れていないものがあり、それらは実行不可能であることがはっきりとしているものであった。例えば、四国制定法の一つは、ガスの割当量を超えた人は、超過使用したガスの値段の百倍を罰金として支払わなければならないと規定していたが、違反者の大部分にとって此の金額の支払はまったく不可能なものであった。実施不可能なことが多い命令や相矛盾する指示の出る状況の下で働きながら、彼らの仕事を遂行しようとしたドイツ人官吏たちは、軍政府命令から巧に逃口を発見し、ただ部分的に指示に従い、ごまかしの手段に訴えることを余儀なくされることが多かった。軍官吏の中には此の苦境を理解し命令や指示に違反しても見て見ぬふりをする者が多かった。だが其の代りに此等の軍官吏たちがさらに上級の司令部から責任の所在を問詰められると、関係しているドイツ人官吏に責任を転嫁することが多かった。

だが、こういう事態には別の面もあった。西側諸国の公式の政策や声明には、民主主義的なドイツの指導者たちを落胆させるものが時々あったけれども、西側軍政府の多くの役人たちは個人的にはこれらの指導者に大きな同情を示し、自由を維持しようとするベルリン人の闘争を助けるために、彼らの出来ることをしたのである。更に西ベルリン人たちは、軍政府の行動を批判する権利をも含めて、相当程度の表現の自由を持っていた。たとえば、一九四七年二月四日にアメリカ管区放送局 RIAS を通じて行われた演説で、ロイターはベルリン行政の些細な点に軍政府委員会が干渉することを批判し、ドイツの諸機関がもっとひろい管轄権を持つべきであると述べることが出来た。

ベルリンの政治家たちが西側諸国から期待し得る援助は緩慢なものに過ぎなかったが、相当程度意見発表の自由を

与えられていたのであって、こういう事態は、ドイツ人独自の態度を發展させるのに役立つ。ドイツの指導者たちは西側諸国から戦略指導を受けるといふ事は全く無かった。それどころか、彼らは常に連合国に圧迫を加えて、連合国側が其權利を擁護しベルリンが共產主義者の支配下に入らないようにすること、ソヴェト側に譲歩することをやめ、その代りに権力闘争に真向から立ち向うことを求めた。西側の政策を強硬なものにすることに於いてベルリン人の果たした役割が、エルンスト・ロイターが封鎖直前に書いた一論文によって暗に明らかにされている。

ベルリンのための闘争は進行しつつある。ベルリン人が此闘争の最終的な結論を左右し得ないであろうことは想像出来る。だがベルリン人がいなかったならば、ベルリンはとうの昔に消えてなくなっていたであろう。今日、もはやベルリンを消滅させることは出来ないという事実は、たしかに自由を愛するベルリン人の努力のお陰である。²⁹⁾

連合国官吏との私的会談においてロイターは、何事が起ろうともベルリン人は自己を防衛するために努力する積りであるが、だがそれにしても彼らは、西側からの援助を期待していると述べたが、これは多分連合国側官吏の決定に影響を与えるつもりでなされたのであろう。市の一役人は一人のアメリカ人に次の如く抗議した。

吾々は背を壁にもたせかけて闘うつもりはない。だが貴方がたは吾々がよりかかれる壁ではない。

通貨改革ならびに封鎖の時に至るまで、ドイツの指導者たちは従来経験にかんがみて、危機の場合に彼らは西側の援助に頼ることは出来ず、彼ら自身の工夫にまかされるかも知れないということを感じていた。又、かれらは西側諸国はベルリンにいる西側諸国の官吏たちの生活必需品を補給するためには、空輸によって充分な供給がなされるであらうという意味の声明に接していた訳でもなかった。そして又、もしもソ連が陸上交通による食糧の補給をさし止めるならば、ベルリン市民に対する食糧補給の責任は赤軍に委されることになるだろうという声明に接した訳でもな

かった。これらの声明は、仮りになされたとしても連合國同志の相互通信の中において為されたものであり、それらは主として噂の形でしかドイツ人民の耳に入って来なかつたし、また、アメリカ陸軍軍人用の新聞であるスターズ・アンド・ストライプスのような報導機關を通じてしかドイツ人民の耳に入って来なかつたのである。これらの報導は、それが聞く者又は読む者の耳や目に届く届きかたいかんによつて、益々人々の心を不安にさせるという性質を持つていたのであつた。

食糧補給の責任が赤軍にまかされるかも知れないなどということは、ベルリン人たちがまさに嫌悪していたものであつた。何故ならば彼らは、ソヴィエトの食糧にはソヴィエトの支配が密接につきまとうものであることを知つていたのである。西側諸國がベルリンを放棄して了うかも知れないという身を刻むような恐れが、一九四八年六月になつて起つた二つの事件を契機として、ベルリンの人たちに抱かれるようになった。まず第一に、ロンドン勸告においてはベルリンについての言及がなかつた。此の省略は西側諸國がベルリンについての計画を持っていないか、或は此の町が見切品売場として、秘密のうちに使用されているかの、いずれかを意味するものと解釈せられた。次に、西ドイツの通貨改革が発表された時に、ベルリンは特に除外された。そして此の事は再び、人心を乱すようないろいろな意見を生ぜしめた。

もしもベルリンが共産主義者の支配を逃れるべきだとするならば、ドイツ人のベルリン市政府および諸政党が強固な立場をとるだけでは充分ではないということ、民主主義的な指導者はよく知つていた。西側諸國もまた其の權威を維持しなければならぬだろう。だが、彼らが其の權威を維持するだろうという保障はなかつた。³⁰⁾

かくて、ドイツ人の市の役人の責任は重大であつた。だが、彼らの権力は制限されていた。彼らに残された唯一の

行動方法は、西側諸国に要請し、ソヴィエトに対してもっと強硬な方針をとって貰うことであり、また、ベルリンの輿論を動員して共産主義者の圧迫に抵抗するようにさせることであつた。

(五) 群衆への訴え

ベルリンの死活を左右する政治制度の支配権をめぐる闘争の多くは、舞台の裏側で行われていた。一九四六年および一九四七年の間、一般の町の人は、社会主義統一党をも含めて四つの政党のすべてが、ベルリン政府に協力しており、而も共産主義者および民主主義者が伝統的なメーデー行事のような色々な記念集會に協同して参加しているのを見ていた。ほかのことは知らなかつた。だが、群衆は次第に闘争の中に卷込まれて行つたのである。彼らが闘争の渦中に卷込まれて行つたのは、一九四七年中に展開された共産主義者の新政策によるものであつた。それはドイツ人民會議への大衆の支持の要請と、ドイツ統一についての署名運動であつた。もう一つの理由は、民主主義的な指導者が労働組合への共産主義者の支配権を打破しようとして、此の問題を直接に個々の労働組合のメンバーに訴へたことであつた。遂にはエルンスト・ロイターのような人たちが、市の支配権を握ろうとする共産主義者の要求を打破するために大衆の支持が必要であることを理解するに至つた。それ故彼らは、此の闘争への市民の関心を喚起すべく、意識的に努力したのである。

此大衆動員は徐々に行われていった。そして民主主義政党的役人たちや独立の労働組合の指導者たちは、多くの困難な而も人に知られない仕事をしなければならなかつた。だが、こういう大衆動員の過程が大規模に観察出来る場合

があった。封鎖に先立って見られたこういう場合のうち最も意義あるものは、一九四八年三月十八日に旧国会議事堂の廃墟の側の広場で、民主主義三政党によって召集された大衆の会合であった。終戦以来民主主義三政党が共産主義者の参加なしに大衆の事件を左右したのは、これが最初であった。

民主主義諸政党が独立の大衆会合を持つと決定したことは、部分的には、共産主義者自身に強制せられたものであった。二月の初めに、社会主義統一党は人民会議の会合が三月十八日に行われるであろうと声明したが、其の日はベルリンにおいて、自由主義運動の勝利を記念して百年祭の示威運動が計画されていたのと同じ日であった。市政府（マデストラート）および市議會は、人民會議の会合には別の日を選ぶよう要求した。彼らは記念祭の示威運動は一般的な事業として計画されていたのだという事を指摘したが、そうすることによって彼らは、人民會議を共産主義者の道具であると看做していることを暗に示した。だが、社会主義統一党がした唯一の譲歩は、人民會議の第一会期を三月十七日に繰上げ、第二会期を次の日に続けて行うというものであった。

共産主義者の支配する示威運動に吸収されるか、または独立に事業を遂行して行くかの、いずれかを選ばねばならなくなった民主主義諸政党は、後者を選んだ。そして旧国会議事堂の廃墟の側で、三月十八日に彼ら自身の示威運動を行う計画をした。燃尽した国会議事堂を場所として選んだことは、ドイツ人たちに、彼らの自由が全体主義政治制度によって吹消されたのは、そう以前のことではないという事を想い出させた。かくて色々な方面において独立集会は共産主義者に対する公然たる挑戦となった。

明けて三月十八日は寒い日であった。だが六万から八万の人々が民主主義指導者の話を聞くべく集まった。ベルリン社会民主党の委員長フランツ・ノイマンが一番最初に演説した。一八四八年にベルリンの労働者によってなされた

要求は未だ満たされていないと彼は述べた。言論と出版の自由は認められていない。東地域には又も強制収容所がある。人民会議はチェコスロヴァキアにおける共産党の「行動委員会」に似ている。そして人の権利は踏みつけられている。彼は次のように其の話を結んだ。「自由ベルリンの叫びは我々の町の境界を越え、さらにドイツの各管区の境界を越えて人々の耳に入っている。我々は我々の挨拶を総ての土地の社会主義者および自由を愛する人々に送ると共に、東地域における数百万の沈黙の部隊にも此の挨拶を送る。」

次に演説したのは、キリスト教徒で老練な労働組合主義者であったヤコブ・カイザーであった。彼は其独立的態度の故に、東地域のキリスト教民主連合の指導者としての其の他位を、ロシア人によって追われた人である。もしもドイツにおいて全体主義が勝利を占めるならば、単にドイツのみならず、全ヨーロッパが二つに割れるであろうとカイザーは述べた。もしも真の自由と民主主義への意志がひろまるならば、ベルリンはドイツの総ての部分との統合を維持するであろう。「ベルリンはドイツの縮図でありヨーロッパの縮図である。だが、吾々は自由なドイツと自由なヨーロッパを欲する。」

三番目の演説者は、ベルリン自由民主党委員長カール・フーバート・シュヴェニックであった。自由を愛する国民は、共産主義と妥協することは出来ないと彼は述べた。共産主義者の方法がどのようにして作用するものであるかということ、われわれは東ドイツにおいて見ることが出来る。それは嫌疑と告発によって始まる。そして権力機関を手に入れるや否や絞首刑がつづくのであって、それはブラーグにおいて見られた如くである。ベルリンはドイツ統一のための最後の保塁である。だが吾々は、統一を得るために自由を犠牲にすることは出来ない。そして、人民会議の存在する限り自由はあり得ない。

最後に演説したのは当選市長エルンスト・ロイターであった。ベルリンに対して神経戦が行われているが、ベルリン人が強い神経を持っていることは、歴史が証明しているという事を彼は指摘した。プラーグは共産主義者に蹂躪せられ、フィンランドもまた脅威を受けている。「だが、次は誰であろうかと尋ねられるならば、われわれははっきりと自信をもって、それは決してベルリンではないと答えることが出来る」。ロイターの演説はこの箇所で数分間の拍手にさまたげられた。彼は次の言葉で其の演説を終った。「そしてもしも世界が此の事を知るならば、吾々は世界から見棄てられることはない。」³¹⁾

当時西ベルリンで最多くの購読者を持っていた新聞の一つである「ターゲスシュピーゲル」は、雨の中に立つ数千人の人たちの写真を掲載し、次の如く論じた。

其れは人心を鼓舞するような光景であつて、沢山の春の景色よりも楽しいものである。何故なら、其れは共産主義者が支配の道具にしようとした恐怖心が克服されたことを示すからである。恐怖を政治武器にしている人たちは、非常に多くの仲間の市民たちが完全に姿を消したことに脅かされ、噂に惑わされ、暗い未来の見透に悩まされているベルリン人たちは、彼らを待っている運命への無感覚な降服を余儀なくされるだろうと信じていた。かくて三月十八日を迎えたのであるが、多くの人々の心のまわりに張っていた氷は此日打破せられた。ベルリンは歴史的な休日を迎ったばかりでなく、もっと深い意味において春の初めを祝ったのである。³²⁾

共産主義者並に社会主義者にとつての伝統的な示威運動の日である五月一日にもまた、西ベルリン人は挑戦的な態度を示した。再び対立する二つの大衆の会合が行れた。一つは東ベルリンにおける共産主義者の支配する労働組合が主催するもので、もう一つは国会議事堂広場で独立の労働組合が召集したものであった。後者の会合には其の主要演

説者の一人としてアメリカ労働総同盟の代表ヘンリー・ルッツ氏が参加していた。ヘンリー・ルッツがアメリカ軍は総ての国の軍隊がベルリンを離れるまでベルリンに止まるであろうと宣言した時、それは大きな話題となった。これこそ正にベルリン人たちが聞きたがっていたことであつた。此会合の報道記事のところでターゲスシュピーゲルは「アメリカ人ベルリンを去らず」と太文字で報じた。もう一人の演説者は西ベルリンにおける独立労働組合主義者の指導者エルンスト・シャルノウスキーであつたが、彼は彼の率いる勢力が、拱手傍観して裏を返せば外国に依存しているような、小さな一政党の補助機関に労働組合がされてしまうことを許しはしないであろうと述べて、社会主義統一党を烈しく攻撃した。³³⁾

だが、此の二回の会合で抵抗の精神は非常に強化されたけれども、ソヴィエトの圧迫が続いても西側諸国がベルリンに止まるだらうということに、未だ確信を持っていないベルリン人が沢山いた。本当にベヴィン外務大臣、クレイ將軍、ラヴェット國務次官などの人々によつて数多くの声明がなされ、米英軍は何が起ろうともベルリンに止まるであらうという旨を述べ、一九四八年一月以降のベルリン新聞が此の事を報道した。だが其れ以前に、連合国がソヴィエト側に色々譲歩したことをドイツ人たちは忘れず、此等の報道以上に此の記憶の方に左右された。

封鎖が開始される数日前に、ベルリンから到着したばかりの西独の一新聞記者は、アメリカ管区のドイツ人官吏にベルリンの暗い状態を語つた。

彼は次の如く述べた。「六月八日に発表され、ベルリンについて何も触れなかつたロンドン勧告によつて、ベルリン人の宿命論的な圧迫されている気分は益々悪化している。ベルリンを引離しておくためにソヴィエトが引続いて色々な手段を講じていることは、此の宿命論にさらに拍車をかけている。だが、鉄道の駅や管区間通行許可証が発行さ

れる事務所のような場所を除いては、神経過敏なところは殆んどない。西側諸国に対する不信の念は、相当程度まで増大して来ている。西側諸国は結局ベルリンを去るかも知れないという恐れがひろまっている。此の恐れは部分的には西側諸国の軍要員特にアメリカ人のそれがベルリンを去った結果によるのである。既に立去った、またはこれから立ち去ろうとしている何人かのアメリカ人について、ほとんど総ての人が知っている。もう一つの理由は、西側諸国が続けて起るソヴェト側の挑発に行動で応答しないというやり方である。此等の事すべてがあるにも拘らず、便宜的に共產主義者の方向を選んだ人は一人もいない。

過去三年間、ベルリンの人たちは他のドイツ人よりも東の独裁制度と西の民主主義を比較するためのより多くの機会を持った。そして彼らは西側諸国に不信の念を持っているにもかかわらず、圧倒的な大多数は自由と西側民主主義の原理に、まったく其の心を捧げているのである。もしももう一度ベルリンに自由選挙が行れるならば、社会主義統一党は多分一九四六年の時よりも少しか得票出来まいであろう。」

次いで其の記者は注意を西側同盟諸国の政策に向けている。アメリカ軍政府統合本部は大いに変化して来ている。多くの部局は解散された。其の他の部局にも、フランクフルトや其の他のアメリカ管区内の場所へ移動されたものがある。アメリカの電話帳には「アメリカ合衆国ドイツ軍政府事務所（OMGUS）」の名で掲載されているものが、一九四七年の秋に比較すると、約三分の一しかない。しかもアメリカ合衆国管区内における機構変化は実質上行われていないのである。ドイツ人をして不信の念を持たしめるに至った「何もしない」態度は、政策面にまでの上って来ている。アメリカ人たちは此の政策を一つのやり方で正当化している。即ち、ロシア人たちは戦争に訴えないであろうと彼らは言う。次に彼らはロシア人たちが鎮圧的な手段をとるために段々と人氣を失って行き、其の契約

上の立場を弱化せしめて行くことを信じている。ベルリン経済を再建するという目標によりも、ベルリンに止まるといふ政治目標の方が優位を占めて来ている。もしも最悪の事態につづいて、さらに最悪の事態が来るならば、ベルリンに対する食糧補給は国際的な慈善機関によって行われるだろうと信ぜられている。ベルリンに関しては、英國もフランスもアメリカと同じ線をとる。

其の記者の觀察の結びは、ベルリン市政府の指導者たちは、絶えず悪化して行く状態を改善するために彼ら自身何もなし得ないために、極度に意気消沈しているということであった。

それにして一九四八年の六月末までには、ベルリン人の中に共產主義者の侵略に抵抗せんと決意した一握の核心が存在するに至っていたが、其の他の人たちは、喰込んで来る未来についての不安と、退廃した宿命論と無関心の態度に触まれていた。此の点で、西ドイツに通貨改革が行われたことは、西ベルリン人の一人一人に、其の運命を東と共にするのか西と共にするのかについて最終的な態度を決せしむべく促した一連の事態を発生せしめたのである。

注

- (1) General Lucius Clay, *Decision in Germany*, Doubleday & Company, New York, 1950, p.159. (Phillips Davison, *The Berlin Blockade*, p.397).
- (2) Frank L. Howley (as told to J.P. McEvoy), "I've talked 1600 Hours with the Russians", *Reader's Digest*, May, 1949, pp.75-76 (Davison, *Ibid.*).
- (3) *The New York Times*, June 12, 1948. (*Ibid.*)
- (4) *The New York Times*, January 13, 1948. (*Ibid.*)
- (5) *The New York Times*, January 13, 1948.
- (6) *Department of State Wireless Bulletin*, January 14, 1948.

- ① Walter Millis (ed.), *The Forrestal Diaries*, The Viking Press, New York, 1951, p. 387.
- ② Walter Millis (ed.) *The Forrestal Diaries*, The Viking Press, New York, 1951, p. 395.
- ③ Walter Millis, *op. cit.*, p. 408. (Davison, *op. cit.*, p. 398)
- ④ Walter Millis (ed.), *The Forrestal Diaries*, The Viking Press, New York, 1951, p. 411.
- ⑤ *The New York Times*, April 2, 1948.
- ⑥ Clay, *op. cit.*, p. 358. (Davison, *ibid.*)
- ⑦ Clay, *op. cit.*, p. 360.
- ⑧ Clay, *op. cit.*, p. 361 (Copyright 1950 by Lucius D. Clay. Reprinted by permission of Doubleday & Co., Inc.); 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 Phillips Davison, *op. cit.*, p. 75 圖書雑誌 44
- ⑨ Howley, Berlin Command, pp. 174—175 and 200—202.
- ⑩ Cf. Dwight Boyd Mitchell, "The Berlin Problem 1943—1949" (unpublished Master's thesis, Department of Political Science, University of Illinois, 1949).
- ⑪ *The Forrestal Diaries*, p. 444.
- ⑫ Howley, Berlin Command, pp. 186—187; see also Jack Bennett, "The German Currency Reform", *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, January, 1950, p. 46.
- ⑬ *The New York Times*, June 20, 1948.
- ⑭ *Ibid.*, June 21, 1948.
- ⑮ Ferdinand Friedensburg, *Berlin-Schicksal und Aufgabe*, Pädagogischer Verlag Berthold Schulz, Berlin, 1953, p. 25.
- ⑯ Ferdinand Friedensburg, *op. cit.*, p. 25.
- ⑰ Cf. *Der Sozialdemocrat*, October 20, 1947.
- ⑱ *Berliner Schicksal*, pp. 47—48.
- ⑲ *Berliner Schicksal*, pp. 51—52.
- ⑳ Cf. Howley, Berlin Command, pp. 122—123.

- (27) Cf. Howley, Berlin Command, pp.141—143.
(28) Speech at the SPD Party Day in Nürnberg, June 30, 1947.
(29) Neue Zeitung (Berlin edition), April 30, 1948.
(30) Ernst Reuter, „Ein Jahr in Berlin“, in Sozialdemokrat, December 16, 1947.
(31) Tagesspiegel, March 20, 1948.
(32) Tagesspiegel, March 20, 1948.
(33) Tagesspiegel, May 4, 1948. (Davison, op. cit., p. 398).

